

看護師と教員の協働によって 「ともに学び，ともに育つ」教育を支える

豊中市教育委員会事務局児童生徒課支援教育係の実践から

植田陽子 草間亜希 森川智瑛

はじめに

大阪府豊中市には公立小学校が41校、中学校は18校あり、看護師による医療的ケアが必要な児童・生徒は、およそ10名前後が通学している。今後さらに医療的ケアを必要とする児童・生徒は増えると予想される。

植田らは以前、豊中市公立小中学校における医療的ケア実施体制とその課題について述べた¹⁾。今回は、学校看護師とはどんな仕事か、仕事内容の周知を目的として、2校2事例の校外学習の様子を教員との協働に焦点を当てて報告する。学校行事の取り組みについては、毎回教員らと入念な打ち合わせを行っているが、加えて今回は、互いの「学習のめあて」「看護目標」を確認

し合い、振り返りの機会を設けることとした。本事例報告を通して、公立小中学校で働く学校看護師の具体的役割の一部を周知することを目的とする。

【学校看護師の体制について】

児童生徒課支援教育係に所属する19名の学校看護師のうち、常勤看護師3名は教育センター事務室に常駐し、主に学校との調整業務を担っている。非常勤看護師(以下、看護師)16名は公立小中学校で医療的ケアを提供している。看護師らは各学校を日替わりで巡回する形をとっている。自宅から学校へ直接出向き、終了後は直接帰宅する勤務もあれば、事務室から学校へ出張し、医療的ケアが終わったら事務室へ戻る勤務もある。したがってカルテは学校保管とし、記録をつけたり常勤看護師へ報告することで、看護師らは児童・生徒の情報を共有している。また、毎週水曜日に事務室で全員参加によるカンファレンスを行い、情報共有に努めている。

【学校の体制について】

学校の通常学級は1学級40人以下で構成されている。豊中市において医療的ケアを必要とする児童・生徒は、支援学級に在籍しつつ他の児童・生徒と一緒に通常学級で授業を受けることが多い。支援学級の児童・生徒には通常学級の学級担任とは別に支援学級の担任があり、支援学級担任は「知的障害」「肢体不自由」「病弱・身体虚弱」「弱視」「難聴」「自閉症・情緒障害」など障害の種別ごとに児童を受け持ち(1学級上限8人)、個別的教育支援計画・個別の指導計画を立てる。学校行事には入学式をはじめ、校外学習(遠足)、参観、宿泊行事、運動会、卒業式などがあり、地域に関連した行事もある。

【倫理的配慮】

校外学習前に、対象の児童および保護者、教員に対して、事例報告の目的、方法、協力の自由、中断や拒否による不利益がないこと、個人情報保護、看護雑誌への投稿について文書(同意書

* 豊中市教育委員会事務局児童生徒課支援教育係

Ueda Yoko, Kusama Aki,
Morikawa Tomoaki

を作成)および口頭で説明し、了承を得た。

なお本事例報告は、豊中市教育委員会に報告の目的、内容、方法などを説明し、許可を得て行った。

I 事例報告(Aさん)

豊中市内小学校5年のAさん、男児(11歳)

診断名：低酸素性虚血性脳症、難治性てんかん

必要とする医療的ケア：呼吸管理、気管内吸引、口腔・鼻腔吸引、経管栄養(胃瘻)、与薬、点眼、眼軟膏塗布

支援学級の担任：B教員

通常学級の担任：C教員

看護師：2名

校外学習行き先：造幣局、近郊の商店街

【校外学習における学年の学習のめあて】

- 造幣局見学を通してお金の成り立ちを知り、歴史に関心をもつ
- 商店街のよさを見つける
- 5年生として自覚をもって責任ある“考動”をする

【Aさんの学習のめあて】

- ①すべての活動を友達と協力して行う
- ②状況に応じて自分の気持ちを伝える
- ③友達や先生の問いかけに答える

【看護目標】

- ①予定している医療的ケアを確実に行う
- ②Aさんが校外学習の目標を達成できる

1. 校外学習当日までの調整

看護師らは校外学習に行くとき、医療的ケアを実施するうえで必要な情報や環境など、把握しておくべき内容がわかりやすいようにチェックリストを作成している。このチェックリストは、学校看護師としての経験年数に関係なく必要な情報が収集でき、かつ情報共有もできるように改良を重ねて使用してきたものである。

校外学習の調整は、B教員が作成する行程表を基に行う。行程表は校外学習当日から40日前に受け取り、B教員に詳しい情報の追加を依頼し、3週間前に改訂版を受け取った。この改訂版を基に打ち合わせを進め、チェックリストに沿って人工呼吸器の電源の確保、乗車中の吸引への対応方法、緊急時の搬送先、経管栄養の内容とタイミングなどについて、B教員・C教員と確認し合った。

今回、造幣局では映像鑑賞、工場見学、博物館見学の3つの行程を、移動しながらガイドの案内で見回る予定なので、看護師もAさんやB教員と共に行動することとした。その後のオリエンタリングは班単位で行い、商店街の中をクイズを解きながら歩く計画であった。

2. 校外学習当日(表1)

Aさんとは行程途中の電車の駅で待ち合わせ、母親から引き継ぎ後、ほかの児童と合流した。途中の乗り換え駅ホームでケアを実施し、造幣局の最寄り駅到着後、再び吸引してから徒歩で移動した。造幣局館内の見学中に、胃瘻より昼の栄養剤の注入・与薬を実施した。造幣局を出るころに雨が降り出

したためAさんはレインカバーを装着し、ほかの児童と共に昼食場所へ向かった(写真1)。その後のオリエンタリングは、雨天のためゴール地が変更された。班の児童らと一緒に各ポイントを回る間(写真2・3)、看護師は医療的ケアに備えつつ、班行動の妨げにならないように少し後方を歩き、見守った。校内活動と比べて流涎が多く、タオルだけでは吸収できずに上着が濡れたため更衣が必要となったが、B教員らと協力して素早く着替えさせることができた。注入、吸引などのケアを終えた時点で、乗車時間が迫っていたため、口唇のワセリンは車中で塗布できると判断して、電車に乗り込んだ。学校近くの駅まで戻ってきたとき、人工呼吸器のバッテリー残量が減りアラームが鳴ったため、B教員がバッテリー交換を実施し、その後、学級の児童と共に帰校した。

3. 校外学習を終えて(看護目標に対する評価)

1) 予定している医療的ケアを確実に行う

看護師らの評価は「目標はまずまず達成できたといえる。ただし、時間的に余裕がなく安全で確実だったとはいえない。Aさんのケアによほど慣れていないとそのスピードでケアするのは難しい」「学校にいるときと同じペースでケアしていれば、電車には間に合っていない。全体に先に乗車してもらい、Aさんはあとからゆっくり帰ることもできたのでは。その選択肢はあったのか」という意見や疑問が出た。当日の看護師は、めあて①「すべての活動を友達と協力して行う」を意識していたので、一緒に乗車できるよう安

表1 ● Aさんの当日の動き

時 間	場所・学年の動き	Aさん・B教員の動き	看護師の動き	備 考
8:30	小学校集合 出発	自宅にて出発準備	看護師の物品を確認し、支援学級担任と共に学年児童よりも先に出発	
8:48	小学校最寄り駅(a駅) Aさんと合流	a駅 学年と合流	Aさんと合流、Aさんの物品確認、母親から引継ぎ	合流後、Aさん近くで終日同行
9:04	a駅出発→乗車	乗車		
9:25	経由駅(b駅) 乗り換え→乗車	注入(お茶) 体位変換* 乗り換え→乗車	注入準備、実施 点眼、吸引	吸引必要時はe駅で降車して実施予定
10:02	造幣局最寄り駅(c駅) 徒歩移動(約15分)	ストレッチャー移動	吸引	移動中のSpO ₂ は88~96%、 停止すると97%
10:25	造幣局到着	造幣局到着		
10:30	映像観賞	注入(お茶) おむつ確認 →映像鑑賞	注入準備、実施 点眼、眼軟膏・口唇ワセリン塗布、吸引	
11:20	工場見学	工場見学 →栄養剤注入	吸引 注入準備、実施(エンシュア®+白湯)	滴下注入(約40分)しながら見学する
12:00 12:15	博物館見学	博物館見学 →おむつ確認・交換* 体位変換*	注入終了後、与薬→物品洗浄 吸引 点眼	
12:30	トイレ休憩 昼食場所へ移動	レインカバー装着 移動(写真1)		雨が降り出す
12:40	大阪アメニティパーク付近 で昼食	友達のそばで過ごす	吸引 (食事休憩)	
13:10	徒歩移動	移動		
13:25	商店街 オリエンテーリング開始	班活動に参加(写真2) レインカバー外す	吸引、記録(写真3)	唾液で上着が濡れ、予定外の更衣が必要となった
14:15	d駅着 トイレ休憩	おむつ確認・交換* 体位変換*、更衣 注入(お茶)	吸引、点眼、眼軟膏塗布 注入準備、実施、予防吸引	ケア場所変更
14:38	乗車	乗車	口唇ワセリン塗布	
15:10	経由駅(b駅)			
15:20	a駅 徒歩移動	呼吸器バッテリー交換 →移動	吸引	
15:45	小学校到着 解散式	小学校到着 解散式	吸引 カルテ、連絡帳の記録	

*体位変換、おむつ交換時は呼吸器から人工鼻(O₂=0.5L)に付け替える



写真1 ●雨の中、昼食場所へ向かう



写真2 ●オリエンテーリングの様子



写真3 ●商店街で吸引

全とともにスピードも意識して行動したが、看護師が安全に医療的ケアを提供するためには、もう少し行程にゆとりが必要、という意見が多数を占めた。その後、校長、B教員、C教員との振り返りの機会をもち、看護師のチームとしての意見を伝えた。

2) Aさんが校外学習の目標を達成できる

めあて①について、このように看護師の見解を伝えたくて、B教員・C教員の意見を聞いた。学級全体とAさんが共に行動することについて、C教員は「全体はAさんの状況をみながら合わせるようにするし、Aさんもがんばって皆と一緒にいけるようにしている。友達もAさんがいないと“来てないよ！”となる」ということであった。着替えや吸引などのケアのため、慌ただしく電車に乗ることになったが、同じ学級の児童が同じ車両に乗れるようC教員が配慮していたことも、振り返りの会で確認できた。B教員・C教員からは、「間に合うのかどうか、どんな状況なのかかわかるように連絡を取り合う方法について今後工夫したい」という意見が出た。

めあて②「状況に応じて自分の気持

ちを伝える」については、Aさんは移動中、涙を流す場面があったが、日常的にこのような方法で自分の気持ちを伝えようとしている、とのことであった。「プレッシャーのかかる場面で緊張する」「レスパイト入院の前に“皆にあいさつしてもらおう”と声かけしたら、前で話をしないといけないのがわかってから目元がジワッと涙ぐんでくる」「話し終わったら脱力してゆるむ」というように、B教員・C教員はAさんの気持ちをくみ取っていた。さらに校長より「Aさんのことをよく知っている人だけにわかるのではなく、誰にでもわかるようなアウトプットの方法がないかと考えている」と懇談で母親に提案した、とのことであった。

めあて③「友達や先生の間いかに答える」については、「子どもたちのほうがAさんのことをよくわかっている」とのことであった。確かに電車のホームでAさんの手をさする児童、自然と話しかけている児童、返事を読み取ろうとして表情に見入る児童など、学級の児童はAさんと積極的にかかわろうとする様子がみられた。

II 事例報告(Dさん)

豊中市内小学校4年のDさん、女児(10歳)

診断名：脳性まひ、てんかん

必要とする医療的ケア：経鼻経管栄養、与薬

支援学級の担任：E教員

通常学級の担任：F教員

看護師：1名

校外学習行き先：大阪市内公共施設

【校外学習における学年の学習のめあて】

- 展示物を見たり触れたりして、自然の事物・現象の変化とその要因を関係づけながら、学校での学びを広げたり、深めたりする
- さまざまな実験道具を体験する
- グループで見学することを通じて、役割分担や協力し合うことの大切さを学ぶ

【Dさんの学習のめあて】

- 公共の乗り物で静かにできる

【看護目標】

- ① 予定している医療的ケアを確実に行う

表2●Dさんの当日の動き

時 間	場所・学年の動き	Dさん・E教員の動き	看護師の動き	備 考
8:30	小学校出発	皆と一緒に出発	事務室で常勤看護師と打ち合わせ	変更後の行程について、E教員と確認
10:00	大阪市内公共施設 電車や地下鉄を乗り継ぎ到着 車内で少し泣いていたらしい	大阪市内公共施設到着	大阪市内公共施設到着 Dさんと合流、カルテと注入物品を受け取り 館内で注入準備	
10:15	施設内展示場 各班見学開始	注入(ソリタ®) 個室でおむつの確認後、班に合流し活動開始	注入実施(写真4) 班の児童はDさんの近くの展示物を見学	
11:00	展示場内	班活動中 食前薬投与	Dさんの班活動に同行 与薬の準備、実施	他校の社会見学などが重なり、場内は混雑している
11:30	1階ロビー 公共施設外の広場	学年全員が集合 注入(白湯) 昼食開始	注入の準備、実施 (休憩、待機)	
12:30	施設内展示場	見学、班活動再開	待機(展示場入口)	
13:15	展示場見学を終えた班ごとに集合してくる 研修室で、展示物に関する勉強	Dさんの班が到着 注入(牛乳)	研修室でDさんの班と合流 注入準備、実施	
14:00	プラネタリウム 地下1階の出入口に整列 プラネタリウム鑑賞	プラネタリウムに入場 プラネタリウム鑑賞	プラネタリウム上映中、車椅子用出入口にて待機	Dさんは皆とは別の、1階車椅子利用者用出入口から入場
14:50	プラネタリウム終演 地下1階出入口で帰校に向けて整列	1階出入口にて注入(ソリタ®) 荷物整理	プラネタリウム終演後、Dさんと合流 注入準備、実施 片付け、記録	カルテと注入物品をE教員に預ける
15:00	公共施設出入口	公共施設退場、帰校	事務室に向かって出発	

②Dさんが校外学習の目標を達成できる

1. 校外学習当日までの調整

Dさんに必要な医療的ケアは、経鼻胃管からの水分注入である。学校生活では時間割に沿って活動するため、医療的ケアは定刻に実施している。しかし、校外学習では電車やバスでの移動に加え、現地での見学や体験があるの

で、学校内とまったく同じ状況でケアを実施することは困難である。そのため、校外学習用の医療的ケアを含んだ行程表をE教員が作成する。校外学習当日から23日前に行程表を受け取り、E教員に詳しい情報の追加を依頼し、10日前に改訂版を受け取った。それを基に複数の看護師の意見を聞いた後、医療的ケアを適切に提供できるようE教員と打ち合わせをした。

2. 校外学習当日(表2)

E教員より、行程変更の可能性があるとの一報が、前日に常勤看護師に入っていた。当日の朝、常勤看護師と担当の看護師とで、現地でE教員と調整する内容を整理し、看護師は事務室から現地へ向かった。

現地でDさんと合流し、入館手続きを待っている間にE教員と変更後の行



写真4 ●入館時の注入の様子

程についての確認を行った。入館後注入を実施し(写真4)、班の児童と合流した。最初はメンバーが個々に展示物を見て回り、分散することもあった。E教員の声かけで、班行動がとれるようになってくると、E教員に抱き上げられたDさんが班のメンバーと一緒に展示物の体験をしていた。

11時の与薬時は、班活動の最中であつた。与薬は2分程度で済むので、班のメンバーはその間、Dさんの近くの展示物を見るなどして過ごした。与薬後、すぐに班活動が再開され、看護師はいったんDさんのそばから離れた。昼食後、児童らは展示場に再入場するため、F教員より次の医療的ケアを実施する研修室に案内してもらい、活動から戻ったDさんと待ち合わせた。児童全員が研修室に集まり学習するなか、看護師は注入を実施した。研修室での学習後はプラネタリウム鑑賞があり、終演後、最後の注入を実施した。その間児童らは、地下1階のプラネタリウム出入口で帰校に向けて整列して

いた。看護師は注入終了後、記録と後片付けをし、物品をE教員に預けた。Dさんは学級の児童らと遅れることなく帰校した。

3. 校外学習を終えて(看護目標に対する評価)

1) 予定している医療的ケアを確実に行う

予定していた医療的ケアは、すべて実施できた。前日に行程変更があつたが、即座に常勤看護師に連絡し、E教員の行程表の更新も速やかであつた。現地で合流したときにE教員に変更点を確認する時間が確保できたため、看護師はスムーズにケアを実施できたと考えている。またE教員からも「支援の子どもさんにとって急な変更はないほうがいいけど、来年の林間学舎のことを思えば、今回の対応はよい練習になった」と前向きな発言が聞かれた。

2) Dさんが校外学習の目標を達成できる

看護師は、活動に合わせてケアするようにE教員と打ち合わせていたので、Dさんは学習を中断することなくケアを受けることができた。また支援学級担任の声かけにより、班の児童も支援学級担任と一緒にバギーの移動を手伝い、Dさんが班から離れないように配慮できていた。班の児童らがDさんを通してメンバーシップを学んでいる様子が見えかけた。

Dさんのめあてについては、行きの電車では少し泣いていたとのことであるが、E教員の指導により泣きやんだとのことであつた。

III 考察

校外学習において看護師らは、学習の妨げにならないタイミングでケアするため、ケアだけでなく全体の行程、場所などの情報が行程表に記載されていることが重要だと考えている。その行程表を基に、児童の動線、ケアを提供する環境、手順をイメージし、ケア時間は確保されているか、行程が遅れたときにどう対応するかなど、当日の状況をシミュレーションする。実際には、表1・2のように100名近い児童と共に短時間で移動しながらいろいろな場所を見学する場合、天候や交通事情、進み方によって予定が変更されたり、時間が短縮されたりすることがある。しかし、行程表に必要な情報が組み込まれており、看護師が時間の前後等の可能性も考慮に入れて備えていれば、全体の行程が多少変更されても、対応は可能である。そのために、元の行程表には詳細な情報を求める。時として教員らには細かすぎる、と映るかもしれないが、今回も必要な情報が得られるまでは追加の情報を依頼した。勝田²⁾は「日々の調整のなかで積極的に議論し、ともに実践するなかで、それぞれの専門職がもつ主義・主張や、特性や技術が相手にみえてくるようになる。看護師がほかの職種のことをよく理解できていないことも課題であるが、看護師とはどのような専門職で、どのようにとらえてケアを行おうとしているのかを他職種に説明できていないことも、また同様に問題がある」とし、専門職が互いの役割について日々話し合うことの大切さを述べている。今回、B教員は情報を追加して行程表

を更新し、当日の予定変更後も適切なケア場所をすぐに伝えていた。E教員は前日の全体行程変更後、即日に連絡し再調整した。看護目標、めあての共有や、入念な打ち合わせといった準備があったからこそ、今回の校外学習も大きなトラブルなく終了したのだと考えている。

以上のことから、医療的ケアを必要とする児童を支えるチームの一員として看護師が役割を果たすためには、教員との協働は必須といえる。ただし、協働は役割分担を明確にするだけでなく、専門性やそれに基づく価値観を尊重し合うことで成立する。日々の教員とのやりとりのなかで、看護師の考えを伝え、各教員の背景や教育観に触れるといったコミュニケーションから連携が始まり、児童・生徒を支える環境が構築されるといえるであろう。

IV 課題

小中学校教員らは、年度が替わるたびに担当する学級が替わる。例えば、支援学級の担任を続けることもある。通常学級の担任などになることもある。学校によっては、医療的ケアの児童を担当する支援学級の担任が毎年交代することもある。こうした教員らの背景を理解しつつ、看護師はどんな情報がいつまでに必要なのか、整理し

て教員らに伝えることが大切だと考えている。

看護師は巡回方式で事務室と学校を行き来し、担当校も日々変わる。そのため、常に最新の情報をもっているとばかりではない。今回、打ち合わせまでは順調に経過していたが、直前になり「今、どこまで情報が整理されているのかわかりづらい」という声が、校外学習当日を担当していない看護師からあがった。また、ほかの小学校では、学校との打ち合わせが校外学習1週間前と直近になったことや、カンファレンスの日が祝日と重なったことで、当日の看護師とほかの看護師らとのタイムリーな情報共有が困難であった。看護師間の情報共有の工夫について、検討する必要性が明らかになった。

また、校外学習は通常の学校教育の環境と違い、時間的に余裕がないなかで教育活動が行われることが多い。学校看護師には、ケアの優先度を考えつつ柔軟に対応することが求められる。医療技術の進歩に伴う医療的ケアの高度化・複雑化に対応し、校外学習や宿泊行事においても安全に医療的ケアを提供できるよう積極的な研修を行うなど、看護師の質的な体制整備の充実を図る必要がある。

V まとめ

「ともに学び、ともに育つ」教育を推進する豊中市において、医療的ケアを必要とする児童・生徒に学校看護師の配置を始めてから2017年度で15年目になる。児童・生徒の学校生活を支えるための教員らとの協働は、少しずつ成熟してきているといえるであろう。また児童・生徒らとかわるなかで、無事に校外学習を終えて胸をなでおろしたり、運動会の団体競技の成功に胸を熱くしたりすることは、看護師のやりがいにもつながっている。今後も医療的ケアを必要とする児童・生徒らの学校生活が充実するように、看護師として教員らと意見や価値観を共有しながら児童・生徒を支援していきたい。

※本稿の写真はすべて本人・家族の了承を得て掲載しています。

●文献●

- 1) 植田陽子, 野田桂子, 佐々木まや: 公立小中学校で働く看護師による医療的ケア実施状況の分析に基づく成果と課題: 豊中市教育委員会児童生徒課支援教育係の実践から. 小児看護 39(1): 118-123, 2016.
- 2) 勝田仁美: 多職種チームアプローチにおける役割葛藤の調整. 小児看護 31(9):1199-1204, 2008.